

## 紹介

### D. フィルツァーのソ連経済論

保 坂 哲 郎

#### 1. はじめに

私は前稿「ブズガーリンのロシア経済論」においてロシア・マルクス主義経済学者ブズガーリンの旧ソ連社会の把握の仕方を紹介した。彼は旧ソ連社会の生産力システムも生産関係システムも「一連の原理的に異質的な、対立する関係（極端に密接に相互関連し相互補完する）の非内在的で不均質な混在が特徴（「サラダ的）」であり、全体を連関させているのは「全体主義的な官僚的システム」であるという（①-P.140）。諸システムの混在する過渡的社会という把握であり、その把握の仕方は私も基本的に賛成である。

しかし、彼自身のソ連経済の実態分析はほとんど欠落しており、彼のソ連論は仮説であるともいえる。今回紹介する D. フィルツァーのソ連経済論はソ連過渡的社会の実態分析の中核部分に該当する研究といえる。D. フィルツァーは引用文献に列挙してあるように、最近、ソ連経済の70年間の歴史を総体的に、歴史的、生産関係的に労働過程に注目しながら分析し、その経済システム機能の不安定性、機能不全性を論証している。その経過の中ではブズガーリンとの討議、その紹介による調査等も行っている研究者である。今回は氏の膨大な実証資料をふまえた研究の結論的部分のみを要約的に紹介してみたい。

#### 1) スターリン的システムの成立

彼はソ連社会を特権的エリート（ノメンクラトゥーラ）による「階級」社会（スターリ

ンに代表される官僚的機構のコントロール)と見る。ネップ期の市場条件に根源をもつエリートは剰余生産物の取得を(市場でも、社会主義計画でもなく)抑圧的国家機構に対する政治的コントロールを通してのみ維持する。エリートは双方からの重大な挑戦に直面する。一方は私的セクターから(農民の集団化への抵抗)、他方は工業労働者から(強制工業化の窮乏や困難にたいし)。その挑戦を排除し、権力を維持するために抑圧的機構、社会のほぼ全体的な原子化(集団的挑戦を不可能にするために)を必要にした(④-序説)。

しかし剰余生産物にたいするコントロール、労働力にたいするコントロールはきわめて不完全であり資本主義以下でしかないという(②-p.8)。ソ連は安定的生産様式を持たない。資本主義でも社会主義でもない歴史的に不安定な社会構成であり、経済や社会構造の再生産の効果的な規制者を持たない。名目的計画化過程を通して経済を規制しようとしたが、民主主義の欠如のため、結果は不安定で高度に矛盾的存在である(③-pp.123-124.)。

「ソビエトは自律的生産様式でも資本主義の変種でもなく、限界をもつ低落する歴史的現実性をもった不安定な社会構成体である」(④-p.1)。

ネップの市場条件は特権官僚層をうみ行政官、経営者機能と結び付く。ここで真の計画化は不可能であった。強制力行使と政治的原子化の方法、労働者階級の共同組織化はできず原子化された個人として機能していく。市場の自然発生的規制や、民主的計画化をとおした共同経済規制に依存しないで、エリートは経済関係を国家的政治的コントロールを通してのみ確立し維持してきた。しかし政治的コントロールは自律的に再生産する生産システムを確立する能力はなく、再生産システムは不安定でありエリートの政治支配なしでは経済諸関係は解体する。機能する極端な個人主義。外面的な「計画」枠組みの中で大きな比重は自然発生性、無政府性によって動かされる経済。労働者に作業させる強制的手段をもたず、30年代の恐怖・強制力も持続的システムではありえない。労働者個々に原子化された行動を取らせたが、他面、労働者の労働過程における行動をコントロールできなくなった。

エリートと労働者との一貫して不安定な関係は続く。資本主義と異なりエリートは労働者と直接関係をもたず、また就業させる手段をもたない。労働過程は労働者＝経営者の工場・職場関係の中で調停される。エリートにとって、労働過程、労働規律、究極的

には剰余生産物の取得・処分能力へのコントロールにおいて相応する未制御な領域が継続する。この点では体制の労働政策は30年代でさえ、労働者の伝統的な労働実践に適応した経営者の自発的意思、実施能力に依存していたのである。

エリートは労働過程コントロールを進めようとし、スターリン期には抑圧的な労働法規に訴える。フルシチョフ期の賃金政策もそうした性格をもっている。しかし、この時期においても、経営者は労働者の不満や労働過程の不安定性を避けるために、公式賃金規則を回避し、職場交渉を強化した。労働過程生産関係は外部政治圧力に抵抗的である(③-5章)。

## 2) フルシチョフ政権による脱スターリン化経済改革

経済的問題解決のために(農業の機械化の遅れ、工業は構造上の弱点:生産性・技術遅れ、遅れた消費財・軽工業)「脱スターリン化」が必要になった。改革は根本的問題を引き起こす。生産性を向上させるために強制的方策がもはや有効でないとするれば如何なる方法が有効なのか。相対的により大きな物質的インセンティブの提供でも不十分である。政治的、知的自由化の促進、政権の正当性確保が必要になる。フルシチョフはそれを理解していたが、それはエリートにとって危険であり限界がある(エリートが特権をうけている基本的階級関係を侵食する事なくシステム改革という限界)。

この限界と矛盾はフルシチョフ改革期を通して見られる。政治的自由化、産業再編成、処女地開拓、農業キャンペーン、党機構編成等の政策が成功できなかった理由は既存システムそのものに潜んでいる。エリートによる政策の無視・歪曲があり、工業・防衛部門諸省は資源再配分を許さず、また「自由化」の限界も明白であった。基本的には既存システムを脅かさないでは実施できない改革という性格を持っていた。

企業内労働者=経営者間の関係も問題を引き継いだ。特に労働者の労働過程への部分的コントロールはエリートのかかえる経済困難の核心であり、フルシチョフ政権はその「改善」を図った(③-序章)。

結果的に失敗に終わったフルシチョフ労働政策は次の三課題を持っていた。

(a) 職場の民主化課題。転職、欠勤を違法とする過酷なスターリン法を無効にした。他面、新規則は労組の力を強化し、経営者が労働者を解雇することを一層困難にしノル

マ引き上げにも労組は拒否権をもつようになった。

(b) 労働力流動性をコントロールする課題。労働力不足を解決するため、非就労女性の労働参加へのキャンペーン、シベリアでの求人、職業訓練の整備。

(c) 賃金やインセンティブ・システムの改革課題。労働者の全体的所得決定にさいして出来高制と超過達成ボーナスは重要性を下げ、ノルマ設定は分権化され経営者に託された。同時に労働者は賃金、技能カテゴリーにより厳格に等級を付けられ、一層過酷な「科学的基礎をもった」ノルマを課す試みがされた。計画遂行、資材・燃料節約、質改善のためのボーナスがより強調された。

しかしこれらの改革の有効性は内包した限界を持っていた。民主化は集団単位としての労働力でなく個々の労働者に限定され、労組の前進は微々たるものであった。独立した自己利益を擁護する集団組織としての労組ではなかった。改革は志気（勤労意欲）問題を前進させる能力はなかった。転職を増加させ労働者の事実上の雇用保証をするという政権意図と反対の効果ももった。規律強化を困難にし間接的に労働者＝経営者の職場交渉の長期存続を強化した。

さらに転職を容易にすることで、自由化された労働法は労働力不足を緩和しなかった。経済の構造的後進性とそのインフラ欠如がさらに重要であった、スターリン工業化の遺産と消費の低い優先順位も影響し、新採用人をシベリアにとどめるのは不可能（住宅、輸送、労働条件、食糧供給が絶対的にも相対的にも悪い）で、また危険、低賃金、悪条件の労働のため女性を就労させるのも困難であった。

賃金改革も失敗した。労働者の所得がより直接的に企業全体の活動に依存するようになったが、不規則な供給と頻繁な設備の故障が作業＝所得を脅かし、経営者は厳しいノルマを労働者に課せなかった。また労働過程における労働者の伝統的コントロールは依然大きな役割を果たし続けた。

また恐怖＝強制にかわりエリートが作り出せた条件は大量失業創出もあったが、これは労働者に代償なしで事実上の雇用保証を切り下げることであり政治的に困難であった。

これらのため「脱スターリン化政策」は矛盾を解決できず、エリートは労働力を社会の中に統合化できなかった。スターリン政策はソ連を「全体主義的」社会でなく（これは存在したことがない）全体的に非組織的な社会へと進めた。この社会の機能不全は国の危機の源泉としてスターリン後継者に認識された。フルシチョフ政権下で、エリート

は労働者と労働過程との全般的関係を損なわないで経済諸目的を達成する他選択はなかったが、それは社会の長期低落と最高の危機を醸成してきた(③-終章：結論)。

### 3) ゴルバチョフ政権による経済改革と経済崩壊

ゴルバチョフ政権期、経済システムは行き詰まる。経済成長は停滞し労働者モラルは最低になった。エリートは権力維持が困難になり、剰余生産物創造と処分へのエリートより大きなコントロールが可能になる経済改革に向かった。労働過程のリストラが必要であった。労働者の伝統的な労働過程コントロールを破ることが必要であるが、当然、それは職場に明白な敵意をうむ危険をはらんでいた。

改革はフルシチョフ期同様にソビエト市民の創出、統合化という面を持ったが、市民社会イデオロギーの基礎創造は失敗した。この創造には長い期間が必要で、社会の発展と安定が必要である。政治的自由化の困難、生活水準向上の挫折の中で失敗していった。

また雇用政策は柔軟な労働市場と自由な労働力流動性をつくることをめざした。改革は大量失業創出、労働の不安定化を利用した労働規律強化を目指した。労働力中の底辺的弱者は条件悪化が進んだが、全体的に大量失業は出現しなかった。意図とは逆に危機の中で供給危機の結果として大規模な一時的レイオフが生じている。それは技術近代化の結果でなく経済崩壊への動向である。

ゴルバチョフ政権の賃金改革は最も伝統的政策の継承といえる。フルシチョフ期と類似した策を再提起し、根本的に組織を変更できず結果は失敗した。深刻化する労働力不足と経済崩壊、部分的に進んだ政治自由化は改革を不能にした。1990年に改革は放棄された。

全政策失敗の鍵はホズラスチョットにあった。資本主義なしのまま資本主義的金融規律で規制しようとする経済再建の試み。この枠組みでのみ経済にダイナミックさを導き政治的構造を維持できると考えられた。選択は明らかに限界をもっていた。資本主義はエリート権力維持が保証されずあまりにも危険であった。結果は市場や価値法則の機能のない、また金融市場、安定した交換可能通貨、株式取り引き所、所有法の欠如、輸送、通信インフラ、労働流動性、資本家階級の条件での、企業、個人の市場論理や行動の奨励であった。

改革は経済混乱、供給危機悪化を深刻化し、労働力貯蔵強化をもたらした。確かに労働者は私的セクター（コープ）へ流出し国営経済にダメージを与えたが、労働流動性を引き起こすには小さかった。財・サービス供給危機で自由交換は不可能になりバーター取り引きが普通になった、財は使用価値のために交換された。

経営者やエリートはペレストロイカへの抵抗をやめ新資本家への転換を図り一部が成功した。しかし利潤増大へのインセンティブも衝動もなく投機や値上げ行動が普及した。独占的生産者として企業合理化、新投資、経費削減を求めず（また経済状況で不可能であった）政治的にも企業内でも停滞がもたらされた。

政治的には民主主義と関係なく、エリートのどのグループが（連邦派、ロシア共和国派）国家財産を継承するかの争いであった（④-終章、結論）。

#### 4) ロシア資本主義に残された遺産

産業技術の後進性を近代的再建することなしで総体的経済近代化の望みはないが、現状は大きく旧来の後進性を残存させたままである。また生活水準向上を契機に改革を促進するというペレストロイカ戦略の失敗によって、軽工業部門は低賃金、低士気、低技術水準に留まっている。

またエリートが経済規制をする中で重要な（緩衝的な）役割を果たしてきた女性労働は経済改革や再建計画の主要な障害であり、ペレストロイカの中心的矛盾であった。歴史的にはエリートは高集約労働と低技能肉体労働者群の中で女性労働者の底辺化をもとめてきた。新資本主義下でもこの根本的問題は未解決である（④-p. 140）。

92年初頭にはロシア産業家・企業家連合が結成され、巨大省は私的企業へ転換した。労働者への対応はより厳しくなった。クーデタ失敗後の党活動禁止に便乗し多くの経営者が組合活動禁止を試み、非公式合意に厳しく臨み、労働規律を厳しくし賃金譲歩をしていない。しかし彼らは実行可能な資本主義を創出できていない。ノメンクラトゥーラ私有化は、停滞資本主義（発展へのダイナミックなし）で立場をえることである。新資本主義は旧指令システムの基礎の上（個人的権力や癒着で結合した独占生産者に支配され、不足経済の中で巨大な利益が生産削減や投機的価格値上げで作動する）で成長している。資本主義の方向は、投資や成長でなく、投機、汚職、資本蓄積を犠牲にした個人的富蓄

積衝動に傾斜している。

経営者には階級を基礎とした統一をつくる能力がない。92、93年には多くの経営者は自己の権力、富の追求に向い資産の売却や投機を特徴とした。技術はあまりにも後進的で技能者不足や供給・品質問題は相変わらず深刻である。しかし彼らは現在のところ労働者階級より急速に階級利害を認識しはじめており、安定化計画、国家投資基金増を要求、富・権力の強化へ向かっている。究極的には生産分野に向かうであろう。労働者階級は現在のところ受動的、脱モラルに留まっている（④-終章、結論）。

### おわりに

ブズガーリンやフィルツァーを紹介する中で理解できるソ連経済とは、剰余生産物生産、労働力管理を掌握できていないきわめて不完全で不安定な社会という特徴である。労働力利用・管理は行政的配分経済の失効、市場経済の部分的黙認であった。ノメンクラトゥラ政権の国家機構独占による行政配分経済は開発独裁に類似している過渡期社会である（マルクス主義の装いをもち、軍部でなく党・官僚による権力独占に特徴があるが）。

この点で、ソ連を中央統制計画経済社会や「全体主義社会」として見るのは大きな誤りであって、実態は失効していく行政的配分システムと黙認され制御できない疑似市場メカニズムとの併存であり、しかも政権はこれらの活動の機能不全に悩み続けたといえるのである。

労働力の社会的編成の仕方はきわめて自然発生的領域が大きく、政権が制御できた部分は限定的であった。また労働過程における労働者の制御も限界をもっており、政権の「意のままにならない」領域、改革したいが改革できなかった部分として残ってきた。

ソ連の社会システム、社会構成体が何であったかを考える時、社会システムとして掌握しきれないこのような領域に注目してみると、それは諸システムの折衷的な「過渡的な社会」といわざるをえない。

最後に、フィルツァーにおける社会主義経済システムの実行可能性はきわめて抽象的な次元にとどまってままであり、労働者階級自身による自己統治で計画経済が実行できるという過大な楽観主義に満ちている。生産手段と労働者との再結合という基本的歴史

的傾向は是認できるとしても、効率的で省資源的な計画経済が実行可能かどうかという問題は未検討なまま残されている。

#### 引用文献

- ① 保坂哲郎「ブズガーリンのロシア経済論」, 高知論叢56号 (1996年7月)。
- ② Donald Filtzer "Soviet workers and Stalinist industrialization - The formation of modern Soviet production relations, 1928-41 -" (1986).
- ③ Donald Filtzer "Soviet workers and De-Stalinization - The consolidation of the modern system of Soviet productions, 1953-1964-" (1992).
- ④ Donald Filtzer "Soviet Workers and the collapse of Perestroika - The Soviet labour process and Gorbachev's reforms, 1985-1991" (1994).